

氏名	中村 剛
学位の種類	博士（ コーチング学 ）
学位記番号	博乙第 3033 号
学位授与年月	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	体育・スポーツの指導実践における促発プロセスの解明 ～超越論的反省分析の視点から～

主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	佐野 淳
副査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	渡辺良夫
副査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	中山雅雄
副査	筑波大学教授	教育学博士	清水 諭

## 論文の内容の要旨

中村剛氏の博士論文は、運動現場における指導者の促発指導の特徴を明らかにしようとしたものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は、体育・スポーツにおける運動の指導現場における指導の難しさに注目している。具体的には、指導者が「促発」のつもりで学習者の「創発」に関わって学習者に助言やアドバイスなどをして働きかけても、それが実質的に学習者への「動きができるようになる」という意味での働きかけにならず、学習者に最適な動きかたを発生させることができないといった例を挙げている。つまり、促発になっていない事例のあることに目を向けている。そして運動の指導現場では、指導者は学習者に運動をできるようにさせるという促発指導が求められているが、これまでその促発指導の具体的な方法上の特徴や視点などは明らかにされていないと著者は指摘している。また現場の促発指導が効果的に進められるためにはまずもって実際の促発を目指した指導を分析し、そこにどんな促発契機の特徴があるかが明らかにされなければならないと筆者は考えている。

このような考えから本博士論文は、実際の促発指導における促発上の特徴を明らかにすることを目的としている。そのために本研究では筆者が指導者として携わった指導実践を例証として取り上げ、そこに現象学的立場からの超越論的反省分析が行われている。

本博士論文は、緒論、第Ⅰ部、第Ⅱ部、結論から構成されている。

緒論は、第1章「研究の目的」、第2章「本研究の立脚点」、第3章「先行研究の検討と本研究の位置づけ」、そして第4章「論文の構成」の4つの章で構成されている。

第1章では体育・スポーツの実践現場では学習者の創発を促進する促発指導の重要性が認識されているにもかかわらず、実際にそうした指導を実行に移すことが難しい現状にあることが確認され、本研究の目的が述べられている。第2章では本研究が立脚する現象学的発生運動学の学問性を確認した上で、本研究の意義が述べられている。第3章では発生論的運動学における先行研究が概観され、本研究の位置づけがなされている。そして第4章において本論の全体構成が示されている。

第I部は2つの章から構成され、本研究で主題化される指導者による促発指導の構造的特徴が明らかにされるとともに、第II部で展開される超越論的反省分析に関する方法論的検討がなされている。

第1章ではまず促発指導の構造的特徴を明らかにするための前提として、この指導の対象である学習者による創発活動の特徴が確認されている。そして学習者による創発に関する特徴を踏まえた上で、指導者による促発指導の構造的特徴が確認され、次いで両者の絡み合いの構造が究明されている。またこの促発指導が現象学の本質直観と軌を一にするものであることも言及されている。第2章では第II部における筆者の指導実践の超越論的反省分析に関する方法がどのようなもので、それによって何が明らかにされるのかが述べられている。

第II部は6つの章で構成されている。ここでは筆者が指導者として携わった器械運動の指導実践が例証として取り上げられ、そこに超越論的反省分析が加えられている。そしてその反省分析の結果から促発指導の特徴が明らかにされるとともに、その特徴が今後の促発指導の適正な実施に対して有する実践的意義が論究されている。

具体的には、第1章では本研究で取り上げる4つの指導実践の特徴がまず述べられた上で、第2章以降で4つの事例が考察されている。第2章では鉄棒運動における逆上がりの初心者指導で動きかたがなかなか定着しなかった事例、第3章ではマット運動における倒立の定位感能力に関する指導実践で不安が一気に解消してできるようになった事例、第4章ではマット運動における倒立の初心者指導でコツをつかむまでに多くの時間を費やした事例、第5章ではマット運動における前方倒立回転とびの指導実践で動作修正に時間がかかった事例が考察されている。そして第6章では、上記の筆者による指導実践の超越論的反省分析の結果から明らかになった促発指導上の4つの特徴（動感形態の構成化における動感変様態、動感形態の構成化に関わる本質法則、図式技術の個人化としてのコツの発生様相、パトス転機による動感意識の様相変動）について説明されている。

そして結論においては、これらの4つの特徴は運動の動感形態構成化プロセスに関する実践知であるとともに、促発指導上の重要な特徴であることが指摘されている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

中村剛氏の博士論文は、運動の指導現場における指導者の促発活動の難しさに目が向けられ、その活動を少しでも改善すべく、促発指導においてあるべき促発契機の特徴を導き出そうとして取り組まれたものである。本研究によって抽出された特徴は体育やスポーツの指導現場において学習者

に対する指導者の指導観点として重要なものと考えられるものであり,そうした特徴を明らかにした点が評価できる. 今後は, さらに多様で複雑な様相を呈する現場の促発指導の実際問題を取り上げて, 現場の指導者の促発行為が効果的に行われるように, その有効な知見を求めて研究を積み重ねることが期待される.

令和 4 年 2 月 1 日, 学位論文審査委員会において, 審査委員全員出席のもと論文について説明を求め, 関連事項について質疑応答を行い, 最終試験を行った. その結果, 審査委員全員が合格と判定した.

なお, 学力の確認は, 人間総合科学研究科学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした.

よって, 著者は博士 ( コーチング学 ) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める.